



Title	アジア太平洋論叢 第16号 序
Author(s)	赤木, 攻
Citation	アジア太平洋論叢. 2006, 16, p. 1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100026
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

序

2006年は、タイを学んでいる私にとっても忘れられない年になってしまった。申すまでもなく、タイで軍事クーデターが生じたことである。民主化が進み東南アジアの優等生と見られていただけに、私も含めて、多くのタイウォッチャーが唖然とした。一見順調そうに見えたタイ政治も、立法、司法、行政のすべての機関が今年の初めあたりから機能しなくなり、その打開が必要とされていたが、こうした形をとるとは予想できなかつた。今回のクーデターの最大の教訓は、政治的民主化がいかにむずかしいかということであろう。

クーデター後に2度タイを訪れる機会を持った。何人かのタイ人識者と意見を交換したが、クーデターそのものへの賛否も含めて、決定的な背景や要因はなかなか明確にすることはできなかつた。

ただ、様々な意見を耳にして、大きく捉えると、グローバリズム経済論と「ほどほどの経済論」との対立のひとつの表現といえるかもしれないと考えた。タックシン政権が志向した経済優先主義、開発至上主義とプーミポン国王が1997年の通貨危機の際に提案した急激な成長や過度な格差を避け、なにごとも「ほどほど」に進めていくべきとする考え方の衝突である。科学や合理性の振興推進と土着文化重視の間の拮抗ともいえよう。

とすると、なにもタイだけではなく、今日のアジア地域で共通して生じている問題といえる。11月には、ハノイとホーチミンに短期間でかけたが、実に10年ぶりのベトナムであった。APECの会議の直後であつただけに、街の変貌振りにはおどろかされたし、大学人と会つても無事に終了してほつとしたという空気が感じられた。教室の中で日本語を学ぶ学生たちと語っても、活力を感じた。しかし、レストランの従業員の態度などにはまだある種の硬さが残っているようにも見て取れた。明らかに、移行社会、移行経済の真只中にあるベトナムであった。本号に所収された論考の中には、こうした問題関心に触れているものもあるようだ。

『アジア太平洋論叢』も、関係者のおかげで第16号を刊行することができた。今回も、個性の豊かな論考が詰まっており、うれしく思つてゐる。このごろ、この研究誌からの引用に出くわしたり、問い合わせがあつたりする。小さなグループに過ぎない「アジア太平洋研究会」ではあるが、今後も地道に活動を継続していくつもりである。大方のご支援をお願いする次第である。

2006年11月
会長 赤木 攻